

2012年2月11日、大正大学において本研究所と宗教者災害支援連絡会共催の公開シンポジウム「東日本大震災における宗教者の支援の現状と展望」が開催された。震災の復興支援において宗教が果たしてきた役割、これからの可能性を探るために企画された本シンポジウムでは、様々な教団の立場から復興現場で活動している諸氏が登壇した。

【パネリスト】

- ・板井正斉（皇學館大学准教授）
「災害・復興と神道文化
——神社をめぐるエピソードから地域での役割を再考する——」
- ・川上直哉（日本基督教団仙台市民教会主任担任牧師／心の相談室 室長補佐）
「公共性の回復——宗教間協力の成果と展望——」
- ・山根幹雄（創価学会宮城県青年部長／宮城復興プロジェクト・リーダー）
「励ましの絆——創価学会の東日本大震災での取り組み——」
- ・吉田律子（真宗大谷派僧侶／サンガ岩手）
「呻く悲しみの中で」

【コメンテータ】

- ・岡田真美子（兵庫県立大学教授）

【司会】

- ・蓑輪顕量（東京大学教授）
- ・弓山達也（大正大学教授）

現代社会における神道（文化）の役割を研究してきた板井氏は、阪神大震災での支援活動や岩手県山田町での支援活動での経験を踏まえながら、従来、支援する側としての教団を中心とした視点に偏りがちであったが、被支援者の現状や地域社会を視座としながら、宗教を多様な関係性のなかの一要素として捉える視点が必要であること、そうした視点から神道が果たしうる役割が見えてくるのではないかと提起した。



キリスト教の牧師として仙台で被災支援活動を行っている川上氏は、自身が携わっている仙台キリスト教連合の活動や超宗派の「心の相談」の活動を紹介しながら、かかる活動のなかで、宗教は私的な事柄である——すなわち公共的なものと見なされていない——からという理由で、被災地では宗教的ケアといった支援活動が歓迎されない現状があることを指摘し、宗教が公共性を獲得する必要性やそのための試みについて述べた。

創価学会宮城県青年部長の山根氏は、自身も体験した震災時の状況や学会の対策活動について紹介したが、阪神大震災の経験から防災体制が整備されてきたとのことで、電気、ガス、水道が止まっているなどの様々な困難がありつつも、支援、復興活動が震災直後からすばやく遂行されている様子を伝えた。そうした活動は組織性の高さがうかがえたが、氏は、それを支えているのは一人一人の自主的な関わりであること、様々な活動の紹介を通して、地域への根ざし、人と人との支えあいや思いやりの大切さについて述べた。

真宗大谷派の僧侶である吉田氏は、仮設住宅では、入居した時点で行政からの支援はストップし生活が立ち行かなくなるために継続的な支援が必要であること、コミュニティーが形成されずに人間関係や孤独に苦しむ人が多くいる状況を訴えた。また、宗教者として活動することが歓迎されない状況が一方にありながら、他方では、生き残ったことへの



の自責の念への苦しみ、生きる意味の喪失といった、“生きることの根”に関わる悩みを多くの人が抱えていることを述べた。切迫した状況へ対応するために個人として活動を開始した氏は、教団組織だからできることがあると同時に、個人だからできることもあること、その一歩を踏み出すためにも一度現地に立つことを呼びかけた。

これらの発表を受けてコメンテータの岡田氏は、各発表を総括しながら、各発表者によって、震災で切れてしまったものをどのようにつなげていくのかについての具体的な話を聞くことができた述べ、もとどおりに戻すことは現実には望めないなかで、これからどのように新しいものを作っていくのかを考えていきたいとしめくくった。

100名近い人数が参加したフロアからは、「支援活動に携わるなかで宗教者であることが障害となったことはあるか、あるいは宗教活動のなかで法律上の問題に直面したことはあるか」「宗教が社会のなかで公共性を得るためにはどうしたらよいと考えるか」「人々が生きる意味を感じられるようになるにはどのような援助が必要だと考えているか」などの質問が寄せられ、活発な議論が交わされた。